

PACIFICHEM 2010開催 —世界最大の化学コミュニティの祭典, 12,700名が参加—

5年に一度の世界の化学界の一大イベントである環太平洋国際化学会議 (International Chemical Congress of Pacific Basin Societies; PACIFICHEM) が昨年12月15日～20日の6日間、米国ハワイ州ホノルルで開催された。

緊張と緩和による刺激創出の場

今回のPACIFICHEM 2010は、昨年4月に発表申込をオンラインで受けつけたところ発表申込数が72カ国から13,644件 (うち日本6,430件)、また最終的な参加登録者数も12,700名を超え、これまでで最多となった。口頭発表、ポスター発表、展示会、様々な会議やイベントが、シェラトンワイキキ、ヒルトンハワイアンビレッジに加えて、今回初めてハワイアンコンベンションセンター (HCC) で行われた。

科学技術とハワイの組合せは、規律と自由、緊張と緩和に通じ、化学界に新たな刺激を与える場として認識され、幅広く受け入れられている。

主催は、アメリカ、カナダ、日本の3つの設立化学会と、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、中国 (今回から参加) を加えた7カ国の化学会である。このほか環太平洋地域の約46の化学会・団体 (日本の31の専門学協会を含む

表 研究発表申込数と参加登録数の変遷

開催年	研究発表申込数	参加登録数
1984 (第1回)	2,660	3,870
1989 (第2回)	4,400	7,570
1995 (第3回)	6,380	7,330
2000 (第4回)	8,774	8,963
2005 (第5回)	11,501	11,146
2010 (第6回)	13,644	12,700

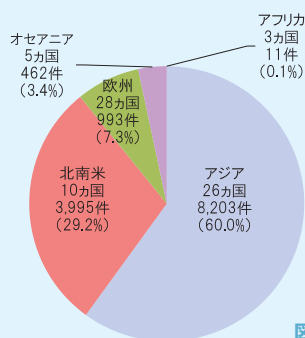


図 地域別主な国別の申込数

地域	国名	申込数
アジア	日本	6,430
	韓国	782
	中国	521
北南米	米国	3,995
	カナダ	923
欧州	独	281
	英	185
	仏	117
オセアニア	豪州	364
	NZ	88

む) が Official Participating Organization として名を連ねた。

今回はカナダ化学会がホスト学会で、ハワード・アルパー教授 (オタワ大学) が全体の組織委員長を務めた。日本からは、巽和行教授 (名大) が副組織委員長を務め、澤本光男教授 (京大)・国内実行委員長、中村栄一教授 (東大)、山内薫教授 (東大)、筆者が国際組織委員として参画し、運営にあたった。

プログラムは、13分野に分かれた235のシンポジウムから成り立っている。今回からこれらの分野をこれまでの“中核的科学領域”、“学際領域”に加えて、時代の進展に合わせ“社会・未来課題領域”を追加して、3つの領域に分けた。

会期中の主なイベント

スタッフは、アメリカ化学会、カナダ化学会、日本化学会の事務局メンバーが務め、それぞれの国の参加者の対応をするのではなく、スタッフ全体が1つのチームとしてすべての参加者に対応をするという心構えを確認した。本会スタッフも、会期中を通じてその精神をベースとした活動ができたと思う。

15日の開会式は、ハワイの伝統的な

祈りと踊りで始まり、アルパー組織委員長の挨拶、アト秒パルス光による化学反応における電子挙動の解明で知られるポール・コーカム教授 (オタワ大学) による基調講演、シェラトンワイキキのビーチに面した広場でのミキサーと

続いた。コーカム教授は、1870年代の世界初の映像映画を引用し、元素の動きを映像で捉える時期が今後10年以内にやってくるという予告で講演を締めくくった。

2010年ノーベル化学賞を受賞された鈴木章先生、根岸英一先生ともに、受賞が決まる前から研究発表申込をしていた。鈴木先生はストックホルム現地での行事のため残念ながら出席できない旨連絡をいただいた。根岸先生は、開会式当日早朝、ストックホルムの授賞式からそのままホノルルに到着され、疲れを見せることもなく12時半から予定どおり講演された。

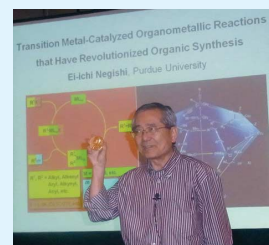


写真1 講演をされる根岸先生

16日に学生ポスター賞審査会が行われ、2,070名の応募者から240名に絞り込まれた候補者を厳正に審査し、最終的に43名を選出した。この賞は、メルク社がスポンサーとなっており、19日に受賞者、指導教官、組織委員による学生



写真2 学生ポスター賞受賞者

ポスター賞表彰式と昼食会が盛大に開催された。一人ずつ名前を呼ばれ演台で表彰された後、受賞者が誇らし気に喜んでいる姿はたくましく、国際色豊かで世界の化学界の次世代のコアとなるであろうと感じた。展示会は日本化学会を含む64団体の出展があり、活況を呈していた。

日本化学会は、米国化学会幹部との意見交換会、ジャーナル関連の打合せなど、岩澤会長を先頭に、海外機関との交流を深めることができた。

事前と期間中の運営

(株)日本旅行の事前登録・旅行受付並びに大会期間中の参加者対応は、組織委員会や化学会との連携を含めてスムーズであった。アブストラクトの登録も、本部で ScholarOne を採用したことを受けて、日本側でその提携先である杏林舎のサポートを受けた結果、順調に進んだ。



写真3 日・米化学会幹部メンバー

また、HCC を起用したことで事前PRや期間中の運営が円滑に行われた。

開催前日と初日、スピーカーレディールームに不備があり、また当日登録に長い列ができたなどの指摘があった。

参加者の皆さんの声、組織委員・事務局スタッフから報告によると、運営全般において大きな問題はなかったようであり、関係者一同安堵しており、皆様の協力とご理解に感謝している。

本会議の役割

本会議は、最初に紹介したように(表)、参加者総数が増えているだけでなく、環太平洋の諸国にとどまらず、欧州から1,000名近く、日本以外のアジアから約1,800名など世界中から参加者が集まっている(図)。このことにより、地域を超えた地位を確立していると言える。また、開催期間中に学術講演以外に、各国学会間の交流会、ジャーナル関係の会議、専門分野や旧知の人たちの懇親会など様々な目的の会合が行われ、本会議の前にハワイでコンファレンスを開催する専門学会が増えていることなど、世界の

〔世界化学年レセプション〕

2011年は世界化学年である。その前年末に開催される化学界の最大イベントであるPACIFICHEM 2010で米国化学会と日本化学会が共同で世界化学年を祝うレセプションを行うことを決定した。レセプションは、17日夕方、日が沈んだ頃から、ヒルトンハワイアンビレッジの芝生広場で開催された。

内容はいたってカジュアルで、司会や挨拶の類はなく、2,000人の出席者が少人数のグループを作り、組合せを変えながら、久々の再会を喜び、紹介しあった。途中で世界化学年の趣旨とスポンサーの説明があり、ハワイアンダンスや花火で世界化学年の立ち上げを祝った。



写真4 左から Prof. Nicole Moreau (IUPAC President), Dr. Nancy Jackson (ACS President)

化学コミュニティにとって必要な出会いの場となっている。さらに、ノーベル賞クラスの世界レベルの化学者が集うと同時に、学生が海外でデビューする場として、若手研究者や学生が最先端の化学者や化学に触れる場としての役割も明確になってきた。

筆者は、化学における日本の存在感を向上させるために、個人ではなく組織としての活動の重要性を感じている。その意味で、今回、根岸先生の参加に加えて、日本から高いレベルの発表を行ったこと、設立学会の1つとして大きな問題なく運営を担うことができたことで、組織としての存在感を示すことに貢献できたと考えている。

次回は、2015年12月に、米国化学会をホスト学会として開催することになっている。日本化学会は、2020年、日本がホスト国となることを念頭に置きながら、準備を開始する。

〔川島信之(日本化学会常務理事)〕

© 2011 The Chemical Society of Japan